

令和2年12月1日



# ようこうだより 12月



園長 山崎 恵美

舞い落ちる木の葉、冷たい風に冬の訪れを感じる季節になりました。『子どもは風の子』と言われるが、まさに、寒風にも負けず毎日元気に戸外を駆け回っています。秋の間に、いろいろな所に歩いて出かけ身体を使って思う存分遊び込んだ子どもたちは、冬の季節に、日本の行事や日本伝統の遊びを通して、更に充実した生活を過ごしていきます。

先日、畑で育てたさつまい芋の収穫を終えました。収穫するのは楽しくあつという間ですが、一年を通して畑の世話をし、ようやく収穫できたさつまい芋の味は格別です。毎年、冬の間、卒園間近の年長ひかり組が、4月に年長となるそら組へ畑の耕し方を教えることにしています。いくつもの大きなビニール袋に落ち葉を拾い集めて発酵、熟成させ、腐葉土も作っておきます。5月になると、いよいよ新年長組を中心に畑づくり開始！手作り腐葉土を混ぜて耕し、畝をつくり、マルチビニールを張ってようやく畑の完成です。梅雨前には、小さいクラスの子どもたちも、一人ひとりが畝に芋苗を植えます。その後、春、夏、秋…幼児組が水やりや草取りに励みます。こうした長い時間の先に、美味しいさつまい芋がようやく顔を出すのです。子どもも大人も「早く、早く!!」と急ぎ立てられ、バタバタと慌ただしく過ぎる生活を当たり前のよう送っている現代社会。四季が移り変わる自然の営みの中で、必要な時間をかけて一つのさつまい芋を手にするのは貴重な体験です。目に見えない土の下で、さつまい芋が大きくなっていくイメージを持ちながら、根気強く世話をする子どもたちの姿に自然環境の重要性を再認識させられます。一年間の経験値が確実に子どもたちの心と身体の成長に繋がっているのです。コロナ禍にあっても大切にすべきことを明確にし、その時々可能な限り力を尽くしながら遊びや園生活を充実させたいと思います。

今年も残りわずかとなりました。年末年始の休みに入る前には、子どもたちといっしょに一年間お世話になった保育室やテラス、玄関の掃除や、いす、窓、靴箱などを拭き上げ、門松をつくり、新年を迎える準備をします。今年はコロナ禍で多くの園行事の中止、変更がある中、保護者の皆様に多大なるご理解、ご協力いただき園生活を送ることができ有難うございました。春から随分と成長した子どもたちは、来年どんな姿を見せてくれるのでしょうか。少し早いですが、年明けに子どもたち、おうちの方々と元気な姿でお会いできるのを楽しみにしています。良いお年をお迎えください。



～芋ほり～

「大きいお芋をほったよ！」

→裏面につづく



## 12月～R3.1月 行事予定

- ★12月16日(水) おもちつき  
※コロナ禍により保護者の方の手伝いはありません。
  - ★12月25日(金) お楽しみ会
  - ★12月28日(月) 保育おさめ
  - ★12月14日(月)まで個人懇談(希望者のみ)
    - ☆1月4日(月) 保育はじめ
    - ☆1月7日(木) お正月遊びの会
- ※新型コロナウイルス感染防止のため  
中止・変更する場合があります。





## “火” との出会い ～たき火～



♪…たき火だ たき火だ 落ち葉たき …あたらうか あたらうよ 北風ぴいぶう 吹いている♪  
寒くなると思わず口ずさむ『たき火』のうた… “たき火” の季節がやってきました。

大昔の人は簡単に火を手にすることはできませんでしたが、著しく文明が発達し、今ではマッチやチャッカマンで何時でも何処でも着火でき、電気やガスなどを使って料理したり暖をとったりと大変便利な世の中になりました。ここ最近では『キャンプ』がブームとなり、火を囲んで気の合う人たちとワイワイ楽しい時間を過ごしたり、日常から離れた場所で火を眺めてゆったりした時間を過ごすなど、たき火が身近なものになりつつあります。

毎年ようこう保育園でも、自分たちで育て収穫したさつま芋の焼き芋パーティーを皮切りに、たき火が始まります。園舎中に、たき火の香りが漂い冬の風物詩になっています。特に幼児組の子どもたちは、たき火に興味を持ち、じつくりと“火”に向き合う楽しさに没頭していきます。

子どもたちにとって、それほど没頭できるたき火の魅力とは何でしょうか？葉っぱや枝を火にくべると、パチパチと音を立てて炎が一瞬大きくなり、そのままにしていると燃え尽きて元の炎の大きさに戻ります。また、一度に沢山くべると、パチパチッ！と音を立てて大きな炎に変化し、可愛いほっぺも真っ赤になり身体がポカポカしてきます。同時に、独特の香りやモクモク白い煙に包まれ、むせたり、目にしみて涙が出たり…五感で、全身で“火”を味わうことになります。

冬が来るたびに、たき火の様子をしっかりと眺めてきた子どもたちは、いよいよ年長組になると、大人からの少しの助言や手助けで自ら準備を進めることができます。ドラム缶の中に木、落ち葉、新聞紙を入れる子、火消し用の水を入れたバケツを運ぶ子など、役割分担をしてテキパキ働く姿は“山の子”のたくましささえ感じさせます。途中で火が消えると、「どうしてかな？」「〇〇してみようか！」とアイディアを出し合います。「ちょっと、代わって！」と、うちわや火ばさみを交代しながら使い、自分たちではどうにもできない難しさにぶつかると、大人へ「手伝って」と手助けを求め学びます。こうして次第に『たき火名人』が誕生していくのです。たき火で暖をとり、時には仲間と協力して、マシュマロ、もち、ジャガイモ、魚などを焼いて美味しく食す体験も重ね達成感や自信に繋がっていきます。

大人の役割は？というと、安全にたき火ができるよう、その日の風が強風でないか判断したり、守って欲しい幾つかの約束を子どもたちと確認することくらいです。その後は余計な手出し、口出しはせず様子をじっと見守ることに徹します。子どもたちは、大人に見守られる中、そうした約束を理解した上で伸び伸びと自分たちで火を操り、刻々と変化する火の不思議さに探求心を深め充実感を得ていきます。

幼い頃に心を動かされた“火”との出会いが子どもたちの記憶に残り、大人になって何処かで、たき火を目にした時、“懐かしい”と感じてくれたら素敵だな…ゆらゆらと揺れる紅い炎が幼い瞳に映るのを眺めながら、子どもたちの将来の姿を思い描く私自身も暖かい気持ちでいっぱいになるのです。